

文庫」として収蔵されている。また、本学附属図書館蔵書中に「无礙庵蔵書」の印のあるものを散見するが、无礙庵（無碍庵、無礙道人とも記す。）は今泉の筆名である。

⑦ パリ万国博覧会

明治三十三年（一九〇〇年）四月十四日から十一月三日までパリ万国博覧会が開催され、既述の仏文本校概要も教育部に出品された。美術部には本校教官も多くが出品したが、それはおよそ次のとおりである。

- 山名 貫義「松に富士」
- 川端 玉章「晚秋溪澗」
- 荒木 寛畝「枯木小禽」 「岩頭孔雀」
- 本多 天城「羅浮の囚」
- 浅井 忠「海岸」
- 和田 英作「機織」
- 中村勝治郎「暮春」
- 小林 万吾「夕の森」 「晚景」
- 久米桂一郎「東京附近の冬夕」 「残曠」 「十月の陽光」
- 黒田 清輝「湖辺」 「智・感・情」 「秋郊」 「樹蔭」 「寂寞」
- 藤島 武二「池畔」
- 石川 光明「古代鷹狩」 「今様婦人」 「藤原通成」 「狸」 「雌雄

鶏置物

- 高村 光雲「盲人川を渡らんとす」 「山靈訶護」
- 竹内 久一「肩車」

- 山田 鬼斎「農夫」
- 長沼 守敬「老夫頭」

- 沼田 一雅「猿廻し」 「秘曲吹奏」 「虎」

- 黒岩 淡哉「子守」

- 海野 勝珉「花瓶」

- 海野 美盛「傀儡師丸彫置物」 「隴銀彫牧童置物」 「花瓶」

- 向井 勝幸「元録人物」 「花瓶」

- 杉浦瀧次郎「置物」

- 川之辺一朝「文台附属品硯箱外各種」

ほかに本校の卒業制作である溝口楨二郎「菅公左遷」、木村武山「高倉帝殿島行幸」、結城素明「兵車行」、渡辺香涯「春遊」、大森敬堂「秋景山水」、和田英作「渡頭の夕暮」、白瀧幾之助「稽古」、湯浅一郎「漁夫晚婦」、島田佳矣「徳川式室内裝飾」、河辺正夫「西洋式建築図案」等も出品された（明治三十五年三月農商務省発行『千九百年巴里万国博覧会 臨時博覧会事務局報告』および明治三十六年三月残務取扱所発行『千九百年巴里万国博覧会出品聯合協会報告』による）。

受賞者については『東京美術学校校友会月報』創刊号の本校関係者（現職教官と卒業生）の受賞に関する記事を転載する。

○巴里博覧會受賞者 四月二十四日の官報にて發表したり 本校に關係あるものは左の如し

金牌の部

- | | | | |
|----|-------|-----|-------|
| 置物 | 沼田 一雅 | 銅置物 | 黒岩 淡哉 |
| 銅器 | 海野 美盛 | 銅器 | 香川 勝廣 |

銅器	故杉浦 行宗	木彫置物	高村 光雲
象牙彫刻	石川 光明		
銀牌の部			
日本畫	荒木 寛畝	日本畫	川端 玉章
西洋畫	黒田 清輝	木彫置物	高村 光雲
銀花瓶	海野 勝珉		
銅牌の部			
日本畫	大森 敬堂	日本畫	下村 觀山
日本畫	横山 大觀	臚銀置物	海野 美盛
花瓶	向井 勝幸	銅花瓶	平田 宗幸
木彫置物	林 美雲		
褒狀の部			
西洋畫	和田 英作	西洋畫	白瀧幾之助
西洋畫	久米桂一郎	建築圖	河邊 正夫
建築圖	島田 佳矣	銅置物	香取 秀眞
漆器手筈	六角 紫水		

金牌を受賞した沼田一雅と黒岩淡哉は彫刻科助教。ともに若くして大家を凌ぐ成績をあげたとして称賛され、『中央新聞』（明治三十三年九月十日、十月七日〜八日）に日本の画家中唯一の金牌受賞者であった大橋翠石（大垣の日本画家で虎の画を得意とした。）とともに経歴が大きく紹介された。

この万国博の際には前回（シカゴ）とは比較にならない程多くの日

本人が見物に赴いた。美術界でも渡航が相次ぎ、万国博ないしはパリに対する関心が非常に高かったことを示している。本校の教官のなかにも次に記すように博覧会見物や留学などの目的でこの時期にパリへ赴いた人が多い。西洋画科教官の久米桂一郎が休職して三十二年末に渡仏したことは既に述べたが、三十三年二月には同科教授浅井忠が満二年間の仏国留学を命ぜられて（三十二年十月十三日発令）出発し、「仏語」嘱託教師の合田清も職を辞してパリ万国博出品聯合協会委員（教育部主任）として渡仏した。五月には同科教授黒田清輝が「美術ニ関スル制度取調並ニ絵画教授法研究ノ為メ」（東京美術学校旧職員履歴書）。三月三十一日発令、満一箇年のフランス留学を命ぜられて出発。九月には「西洋美術史」嘱託教師の岩村透が職を辞して渡仏した。彼らは浅井を除いて三十四年春には帰国して復職するが、その間西洋画科の授業は藤島武二、長原孝太郎、中村勝治郎、小林万吾らの手に委ねられ、新聞のなかにはこうした状態を

○美術学校の昨今〔中略〕▲浅井氏行き久米氏行き而して残る所の黒田氏亦た近きに往かんとす いづれも佛蘭西へなり 是れ美術学校の頭腦を抜くに等し 學校はしばらくぬけがらの有様にてあらんとすなど悪口をたゞくものあり 如何にノンキな學校なりとは言へ肝心の教授がいづれも出拂ひとは餘りの事なるべし▲黒田氏は自費にて出張の事なれば其費用も大變なるべしなど餘計の心配をなすものあり そは兎に角氏は渡佛の心一時も抑へ難き爲めにや昨今至急生徒の學年試験を始めたりと 生徒は是はチト早過ぎると驚きやら早く學校が休みになると喜びやらさ

(明治三十三年三月二十二日『京華日報』)

〔上略〕一博覽會の爲めに上下教授者をして狂奔せしめ、我が美術學校をして久しく油畫の一科を慌廢せしむるに至らしめしは何等の不都合ぞや、文部當局及び美術學校長たる者は其の責を辭する能はざるべし

(同三十四年五月七日『日本』)

と非難するものもあつた。ほかに彫金科教授海野美盛も休職して三十三年二月に私費で渡仏している。

本校以外では小山正太郎、福地復一、岡崎雪声、池辺義象、竹内栖鳳、新海竹太郎、北村四海その他が渡仏し、彼らや新聞特派員らが次々と送つてよこす報告が各紙の紙面を賑わした。ただし、日本の出品物、特に絵画、彫刻の不評を報じたものが多く、絵画の場合には展示室が米仏兩國のそれに挟まれていたためか、それと比較して「我邦の洋畫は、何となく光澤十分ならず、うど黒く見ゆ。最も遺憾^{〔な〕}にるは、日本畫の題目に變化少なきと同時に、洋畫の題目に、好題目の乏しきことなり。」(明治三十三年六月二十八日『国民新聞』人見一太郎)とか、「目下我國で旭の勢を以て世人から歡迎されて居る彼の所謂新派、即ち黒田、久米、和田、岡田等の諸氏の作品が殆んど豫想外に顔色を失して居る」(同年七月三十日『日本』某生)とか、あるいはまた、「我日本の出品は日本畫も洋畫も總じて拙劣を極め諸外國に肩を並ぶる能はず 日本に於て大家の稱ある橋本雅邦氏が畫ける龍虎、黒田清輝氏の裸體婦人の如き着想と云ひ圖取りと云ひ

彩色と云ひ一として取る可き所なし(淺井忠氏の海濱なども平々凡々書生の作たるに過ぎず 其他皆同じ)(同年八月四日『時事新報』土屋元作)とかの酷評が目立つ。藤園(池辺義象)は日本画、油画について「その品少からざるにあらず、その意匠筆つき優ならざるにあらざれども、余ハ歐米諸國と並び評すること能はざるを悲しむ。」(同年七月二十七日『東京朝日新聞』)と言ひ、「彫刻に至りてハ、余ハ更に言ふことを欲せず。」(同上)とし、北鷗生なる人は「日本人ハ油畫を描く能^{あたは}ざる乎」と題する論評を送つている(同年八月二十四日『読売新聞』)。西欧先進國の美術と並べてみた場合、自國の現代美術が非常に見劣りすることに渡航者たちは大きな衝撃をうけた様子である。こうした不評のなかで出品者のために多少なりとも弁護を買つて出ようとしたのは芋洗仙人(岩村透)で、その論説が明治三十三年九月六、九日の『二六新報』に連載されており、洋画に限つて述べているが、これとても、

〔上略〕兎に角、居た溜れぬ丈の部屋が出来て、不出来のもので、^{ならん}並で店を張る丈の品があり、悪口を云ふ丈の材料がある丈が日本洋風畫家の威張り處。歐米の國と争ふて後れを取らぬなどとは思ひも寄らぬ事である。散々撲滅策を出來得る限り施された中に貧乏と、飢渴に迫られて唯々強情一編で遣り通しても碌々水もない地面に成長した製作と、國力を盡し上下^{上下}舉て發育を贊助し而も數百年來の系統を傳へて今日に發達して居る圓滿の製作と比べて若し同じ様なものが出來たらソレコソ大變。〔下略〕

と、甚だ氣勢のあがぬ弁護であつた。後年、彼の仲間の和田英作が次のように述べているところをみれば、ほかに弁護のしようもなかつたのであろう。

巴里萬國博覽會美術館日本部の油繪出品は、黒田先生が日本へ歸られて、初めて日本婦人の裸體モデルを使つて描いた、『智、感、情』と云ふ裝飾風の三部作と蘆の湖畔に立つ浴衣姿の美人畫『湖畔』をはじめ久米先生は風景を岡田三郎助君は、當時巴里に滞在中であつた田中光顯伯の令息田中遜君（田中伯爵）の肖像を、満谷國四郎君は蓮池のある風景を、吉田博、中川八郎の兩君は細密描寫の風景を、私は東京美術學校の卒業製作『渡頭の夕暮』と、板寸の小點に機織女を描いたものを出品しました。勿論、此の外に太平洋畫會系の人々や白馬會の人々も出品してゐたのであります。當時、農商務省では此の博覽會出品に對しては、可なり多額の補助金を交附してゐましたやうでありますが美術部の出品にも相當の補助金を出したり、安いものは買ひ取つて陳列したりして呉れたものでありまして、私の機織女なども大枚五十圓で買ひとつて陳列して呉れましたもので、油繪の額縁などはみんな農商務省のお金で、巴里で新造して呉れたものでありました、審査の結果で黒田先生の『智、感、情』は銀牌になりましたが、世界各國の油〔欠損〕の中に出た日本の油繪の姿は、極めてみじめな、非常に弱い影のうすいものであることを感じて、これは一大事だ、我々は大いに奮發しなければ、油繪で世界を相手に互角の争ひをすることは出来ない、しみじみ感じたものであります

た。日本畫の方は博覽會の出品として僅な時日に描きあげたものが多く従つて急拵へのものであつたのは是非もありませんが、一般に日本の美術部は振ひませんでしたやうに思はれました。その中で現在大阪にある黒岩淡哉氏の彫刻胸像が金牌であつたのは些か心強いものがあつたと思ひます。〔下略〕

〔画壇の四十年・足跡を顧みて〕（四十三）和田英作談『東京毎夕新聞』昭和九年十一月十一日

淺井忠も日本の出品については大方と同様の感想を抱いた様子であるが、彼が特派員に語り、あるいは故国へ書き送つた論説は、単に非難に終始するのではなく、自分を含む日本の美術家が今後どうすべきかということを念頭に置いた論なので、ここで紹介しておきたい。

○巴里博覽會

六月四日 特派員 土屋 元 作

淺井忠氏の説

前回讀者に約したる如く予は六月二日畫家淺井忠氏と同伴して美術館を見物し氏の説を聞き得たればこれを左に紹介するなり 淺井氏の曰く 予は日本に居る時より毫も今日の畫に満足せず ソレに就ては色々の感じを心に抱き居りしが當巴里に來りてループル其他を見又此博覽會を見物するに及び益々自ら拙を感じるのみならず日本畫家の弊とする所を感じることも亦數層の強きを致せり 此處に出品せる日本畫家の作を見れば（自分の畫も亦其内に

在り) 恰も瀕死の老翁が僅に杖にすがりて立てるものゝ如く精神もなく氣力もなく色は全く乾燥無味にして有れど無きが如く實に憫む可き有様なり

和洋なく流義なし

日本に於ける和畫と洋畫と同一に見る能はざるは勿論の事其洋畫の中にも所謂舊派なるものと新派なるものとは全く別物にして非常の相違あり 和畫に於ても亦狩野と四條土佐と浮世繪雲谷と漢畫の如き一々明白なる相違を見ることなれども當地に持來りて此會場に陳列する時は和洋もなく流義もなく日本畫は盡く皆一様にして差別なき如く見え然も一樣に皆拙劣にして殆ど畫と稱するも恥かしき位なり 唯水墨の山水に些か潤ひの有る様なれども彩色畫に到りては潤氣しよひを存するもの一點もなしと云うて可なり 尤も此陳列場に赤色のカーペットを敷き詰めたる如き日本畫の爲めには餘程の敵樂にして爲めに幾分の索莫を致したるならんも^そ開は唯陳列上の缺點に止り大體作品の可拙を如何ともすることなし 殊に面白きは日本に於て大に批評家を煩はし巧拙の争に忙しく一段乃至數段の優劣を以て及第に及びたる畫面が此所に來れば唯一様に拙つたなく予の畫きたるものも予の門弟の畫きたるものも殆ど其間に差別を見る能はざる事なり 西洋日本の徑庭推して知る可し

日本畫家の欠點

是は兼々深く感じ居る事なるが今の日本畫家の欠點は第一ドローイング(下圖)を勉めざるに在り 否 獨り畫家のみならず彫刻家も蒔畫師も陶器家も七寶家も總じて日本の工藝家及び美術家なるものは頓とドローイングに重きを置かず 胸中に十分の成竹な

くして直に畫其他の物を作らんと企つるの弊あり 即ち此出品の畫竝に彫刻物の如き日本に於てこそ目立たざれば平生ドローイングに力を盡し骨格位置等に申分なき西洋作品の傍に來れば其欠點著しく顯れ見苦しき事譬へ方なし 日本に於ても古の名家は皆ドローイングに十分の力を盡したるものにして例せば光淋しんの如き大擔疎笨と見ゆる畫を作りし畫家も其筆を下す前細心銳意數十枚のドローイングを爲し明に自ら満足するに至りて初めて畫面に手を着けしものなり 然るに今日の畫家はドローイングを以て面倒なりとし不完全の頭を以て直に絹紙カンパスに臨むが故に骨格の誤謬遠近の間違等歴々として指點す可く徒に畫家仲間の物笑となるのみならず亦素人の嘲をも免れざるなり 残念の至と云ふ可し

次に日本畫の欠點は圖樣彩色共に變化に乏しく種類の少き事是なり 西洋畫も從來は流義などを固守して變化に乏しく國によりて一定の風などありしが近來の大進歩とも見る可きは全然古風の束縛を脱し自由自在の時代に入りたる事にて此博覽會を一見するに當りても國の畫様に著しき差別なく何處が何處やら殆ど判然せず又何派何流など口には稱すれども實際は其流義も亦殆ど有名無實にして各人銘々の流義を認むるのみ 從て其圖樣も色遣ひも千差萬別種々無量にして區域の廣きこと驚く可し 斯くてこそ始めて畫家が其天才を十分に奮ひ得べきものにして畫道發達の眞途に達したるものと云ふ可し 然るに日本の風は好んで各種の流派を分ち何流には此筆を遣はずとか何派の色は是に限るとか云ふ如き束縛を構へ此にてもソレに違ふものは怪畫なり變畫なりと云ふて排斥を加ふるの風あり 和洋を問はず此弊の盛なるが爲めに折角天

才の人出るあるも十分其腕を延す能はず舊式の圈套中に浮沈して
一生を空くすること惜むべき次第なり されば今日の急務は畫道
の封建時代を顛覆し四民平等自由競争の道を開き大に後進を鼓舞
するに在り 美術院の怪畫の如き毫も怪として恐るゝに足らず
彼類の怪は怪の最も小なるものにして西洋今日の大怪物に比すれ
ば活動の微々たること言ふに足らず 畢竟未だ自由の空氣を呼吸
する能はずして舊來の束縛に苦しめらるゝものゝみ 怪物の跋扈
は喜ぶ可き所に非ざれども無用の束縛を脱却したるの點は慥に一
段の進歩と稱す可し 是ぞ日本の學ぶ可き所なる

一方に於て大に從來の束縛を解き畫家をして自由に其手腕を揮は
しむるの必要あるを認むると同時に予が畫家に向て注意したきは
銘々獨立の思想を有し敢て輕々しく人の爲す所を學ばざるに在り
残念なる事には日本の畫家は見聞の廣からざるが爲めか新に西
洋より歸り來る人などある時は一概に其人の風を以て最も善良な
るものと妄信し争てこれに模倣するの弊ありて立脚地の定まらざ
ること浮萍の如し 例へば數年前川村氏が伊太利より歸朝すれば
川村風の畫を書くもの多く黒田氏の佛蘭西より歸り來れば忽ち黒
田風の畫家を生ずる等即ち其例なり 斯く輕卒に動搖するは遺憾
千萬の次第にして畫家を以て自から居るものは固く己の信ずる所
を守り一切他人に頓着するなきを要す

又次に日本畫家及び工藝家の欠點は意匠手工ともに大様なる所な
く小刀細工に汲々たるに在り 西洋及び支那の作品には必ず主點
とす可き所ありて一目瞭然其美を認識するに難からざれども日本
近來の製作は何物を問はず意匠の上にも亦手工の上にも判然主點

を認め得べきもの少く何か狹小間しく見るも面倒なる品物多し
今回出品せる和洋畫は素より彫刻類に至りても無用の所に筆を勞
し或は刀を加へなどして折角の美を傷けたるもの多し 當代の日
本作家中獨り此弊に陥らざるものは陶磁器製造家眞葛香山氏なり
氏が工藝部に於ける出品の如きは何れも人意を強うするの傑作
と云ふ可し

又日本に於ける美術家の通弊は廣く世間を對手として製作を事と
することなく所謂批評家なるものゝ評論を標準とし汲々唯これに
背かざらんことを希ふに在り 批評家の評説素より聞く可しと雖
も今日日本の批評家なるものは大抵狹隘なる意を有し窮窟なる議
論を吐くものにして自由寛大の思想を有するもの殆ど皆無なり
然るに世の美術家なるものが偏に其説を尊奉して金科玉條とし
一切これに従つて行動するは間違の最も甚しきものにして日本美
術の萎縮不振なるの原因主として此に在り 一日も速に此風を一
洗し美術家をして自由放任の空氣に生息せしめざれば到底傑作の
出づ可き見込あるなし されば予が今日日本美術界の急務とする
所は一方に於て此大弊を除き去ると共に他方に於ては大にドー
リングを奨勵し如何に苦心の作なりともドーリングの不完全な
るが如きは遠慮なくこれを排斥し極力ドーリングを勉強するに
非れば美術家たる能はざることを曉らしむるに在り 美術品の顧
客及び新聞記者等は十分此事に盡力あらんことを望む

〔以下土屋特派員の説は省略〕

〔明治三十三年八月八日『時事新報』〕

○美術通信 △△生
淺井忠氏の巴里通信(上)

左に掲ぐるは佛國滞在在中なる淺井忠氏の私信なれども青年畫家の參考に供すべきこと多きを以て通信の通信として此欄に掲ぐることにしぬ

△當地着以來、御報道致すべきこと餘り澤山過ぎてミューゼー、サロン、博覽會等數回見物致候へども品澤山にて少しも記憶に存せず、緩々觀察の上、少しは私見を加へて申上げべくと延引致居候、博覽會も此頃は大抵整頓、今回は美術館の模様につき思浮べたることを一寸と申上げべく候、同館は油繪彫刻の出品無數にして日々見物候へども未だ十分見盡し難く精しくは後便に譲るの外なく候、さて同館に入れば直ぐ彫刻室、宏大無邊の彫刻ニヨキ／＼と突立ち居り先づ呆氣に取られ申候、彫刻は暫くお預けとして二階の油繪室に至れば佛國自慢の出品、十年この方名家が腕を奮ふたる製作兼てサロンの目録にて見たることあるもの澤山なり、名家と云ふ名家、大家と云ふ大家、何れも腕に捻を掛けて少なくも五六枚、多きは十枚位出品有之、大作となれば十間もある畫面に數百の人物を描き實に眼が眩み申候、なかなか其中の十枚でも二十枚でも選定せよと云はれ候とも何うして宜いやう一向見當が付かず候、五六回は十分入念に見物致候へども未だ批評は出來申さず候 唯打見たる所にては畫風の千差萬別驚くの外なく、黑白のみにて仕上げたるあり、藍色のみなるあり、褐色のみなるあり、淡きこと烟の如きあり、堅きこと石の如きあり、濃きこと漆の如きあり、描法に至りては滑かきガラス畫の如きあり、ゴツ

ゴツしたる盛上げの如きあり、モヂヤ／＼として何が描きあるや一向不分明なるあり、鍔細工の如く篋にて大幅を一面に捏付けたるあり、中には餘り奇に過ぎて何が描きあるや何の意味やら一向分らず美術院風のものもあり、高嶋風あり、中村不折流、龜井流あり、田村宗立流あり、大凡何人の流儀でもなきものはなしと云ふことを斷言して憚らず、繪畫の働く所はさる狭きものにあらずと云ふこと丈けは一見して分り申候、日本の青年畫家は唯宜しく自己流を倍々發達せしむべし、自己流を發達せしめて各其奥儀を極むるこそ然るべけれ、日本人が如何に汚なき畫を描きても當地の畫家の汚なきには如かず、如何に奇麗なる畫を描きても又その奇麗なるに如かず、而してデッサンの稽古に身を入れ畫を描くに親切なるは驚くべし、小生も兼てデッサンは大切なりと口には云ひ青年畫家も斯く承知しながら何時も二の次に致し居るは残念に堪えず候、デッサンが旨く出來ざる中は畫かきの部には入らざるもの候、多數の出品中には一向感服せぬものも澤山あり、自分にも此位ならば及び難きにあらざと思ふものも澤山有之候、併し日本畫のセクションに至りて同胞の畫を見れば人物は皆グニヤ／＼として居り山水は薩張遠近なし、色が皆死んで居るやうに見受けられ申候 但し細部には旨い所も見え候、日本人の畫は皆細かき筆遣ひなどに身を入れたるやうに思はれ申候、一向其末に走りて本を修めざるものなり、デッサンなる哉

△日本に居る中、諸名家の縮圖を見て實に尤らき畫なりと感じたる物、當地に來りて實物に接するとき色拙くして嫌味タツプリなるもの有之、又面白からずと見たるものにて大變に宜きも有之

候、何れもデッサンが宜き故寫眞に取れば宜くなるものと被存候
△日本の陳列所は佛國と米國との間に挟まれ佛國の傑作を見て日
本の部に入り更に又米國に這入るといふ都合に候、米國の進歩は
恐るべきものに候、夫れより英國、獨國、伊太利 英獨素より宜
し、伊太利は實に退歩の姿なり、國々各特色あれども當代の畫風
は皆佛國に化せられ、大抵大同小異にして一見しては何處から何
の國と云ふことは分らず候、日本にては紫派と舊派との區別ある
が如くなれども各國の千差萬別なる中に挾まれては日本油畫は皆
同一流儀の如く見え候、而して色は皆眠つたやうに見え申候、是
れは自然の氣候等にも關係あることなるべし

△特に日本畫の如きは狩野と四條と絶對の相違あるものにて、矢
張同一流儀に見ゆるも可笑しく候、即ち西洋油畫の實に變化に富
み流儀の多きことを御想像被下度候

(明治三十三年八月二十六日『時事新報』)

○美術通信 △△生

浅井忠氏の巴里通信(下)

△前にも申上候通り日本の油繪は遺憾ながら顔色なし、何れ審査
の上、多少は賞牌を貰はれ申すべき歟、併し只お世辭に呉れ候も
の故貰ひたるもの決して天狗になるべからず、油繪の審査官總數
五十人も有之、日本よりは杉竹次郎君一人審査官となり(油繪日
本畫)其中佛國人は都合三十名もありと云ふ、(彫刻には日本の
審査官なし)審査官連中日本の出品には總て頭より馬鹿にして掛
り居る故、宜い加減の事をして身を入れ鑑査したりとは見受け

られず、當りたるものは仕合位の所なり、日本畫は油繪よりも宜
き賞を得べくと存候へども是れとても精しく調査したるものにあ
らず、當づゝぼうのこと故、變なものが宜き賞を得るならむと被
考候、小生の意見にては日本の美術品は總て擬賞などなき方獎勵
上得策ならむと存じ、二三の當路者にも右の次第を咄し候へども
其うも參り兼候、定めし受賞者は佛國にて賞を得たりとて忽ち天
狗になるもの多かるべし、夫れも眞に値打ありて受賞せしものな
らば天狗になるも惡からず、富籤に當りて俄大盡になるもの其終
知るべし、此處御味ひ被下度候

△日本の洋畫家は今度の始末に鑑み、次の外國博覽會へ出品する
までには十分實力を養ひ置き腕を奮はれむこと希望に堪へず、大
さは可成大ならざれば矢張損なり、畫風は前述の如く十分自己流
を發揮して決して迷ふべからず、脂色やじいろは當時用ゐぬ者多しなど云
ふは偽の骨頂なり、ピチュームピチュームのみにて描くも決して不可なきこ
とに候

△油畫の出品中、奇變なる畫の多きは塊大利 瑞西、丁抹てんまつく等な
り、露西亞にも間々奇なる畫を描くもの有之候へども所詮はごま
かしに過ぎず、佛獨英等甚だ眞面目のもの多し、米國割合に意氣
なるもの多く進歩の跡甚だ著し、蓋し佛國を手本にして未だ自國
流はなきものと存候、重味なく、大傑作なく、その特徴は平等に
中位に旨まきまきまにありとす

△當地の水彩畫は割合に感服せず、パステルは甚だ雅にして進歩
著し、英國の水彩は油畫的にして一見パステルやら油畫やら又水
彩やら分らぬ物多し、臺紙なしに金縁きんぎょを拵めて油畫と少しも變ら

ず、胡粉をこてこてに使ひたるもの、スポンヂにて洗つては描き洗つては描きしたるもの、大なるは六尺もあるものあり、細かきはコロム畫の如きものあり、實に種々雑多なり、或は水彩と墨繪と合併せしもの、パステルと水彩と合併したるもの、ペン畫と水彩と合併したるもの、有らゆる畫の種類の出來る丈けを遣り盡したるが如し、何ういふ畫は流行せぬとか、描かぬものなど云ふことは決して無之候、日本の青年畫家は如何なる畫にてもごまかし仕事にあらざる以上は材料の如何を問はず安心して勉強せられむことを祈り申候

△日本の青年畫家にして數百年來研究したる當地の大家連と俄かに競争せむとするは勿論烏澁の沙汰なれども世間は廣く上手もあれば下手も中々に多し、現に青年畫家の製作を見れば下手の中の宜き物と申して差支なく候、只不退轉の心を起して不亂に勉強すれば聽やがて上手の中に入るべし、心掛一方にあることなり、下畫に十分骨折りに少しも横着を極めず、直す所は何處迄も直すべし、而して時流に媚びず自分の思ふ所、信ずる所を貫くべし、畫に親切にして丸きものは丸く見え、遠き所は遠く見えるやうあるまで奮勵すべし、視よ、有名なる大家の畫にも消したる痕の歴々として指點すべきを

△今度の博覽會にはアンプレシヨニストの製作甚だ尠なし、人は其分に依りて斯る思想を持ち、斯る畫を好むものは此派の流れを酌むも素より妨げず、通例の人は矢張通例の畫を描き候方然るべき乎、歐洲にも此通例といふ描法かまかた多きを占めたり、只何處までも實體じつていに實寫して念入りのものを描きたきことなり

△當地の畫家にはルーブル、レキサンボルクなどに行きて摸寫するもの無數なり、白髪の老人夫婦にて熱心に摸寫に掛り居るを見たること有之候、それで下手の畫かき澤山あり、皆賣つて稼ぐ事と存候

△今年のサロンは案外不出來にて有名の人も甚だ尠なし、今年のサロン位ならば手に唾して追付くことも難からずと存候

(明治三十三年八月二十七日同紙)

黒田清輝は今回の渡仏の際には「歐洲出張日記」(『黒田清輝日記』第二卷、昭和四十二年中央公論美術出版)を遺している。それによると彼は七月六日にパリに到着して先行の久米桂一郎、和田英作、小代為重、海野美盛らの出迎えをうけ、以後、パリのアトリエでモデルを雇つて制作に励み、師のラファエル・コランを時々訪れて画の評を乞うなどして勉強を続けた。その間には中丸精十郎、久保田米齋、岡田三郎助、小林万吾、佐野昭、合田清、久米桂一郎としばしば会い、三十四年二月十五日から三月十一日まで久米、佐野とイタリヤに旅行し、ミュンヘン、ブリュッセル、ベルリン等を経てパリに歸っている。そして、この三人は四月二日から五日までロンドンへ出かけ、六日にパリを發つて帰国の途に着いた。黒田はその間の行動を克明に記しているが、なお、明治三十三年十月十四日の『二六新報』に彼の消息を伝える記事が載っているので参考資料として掲載する。黒田の日記は明治三十三年七月七日から同年末までの間が欠落しているが、これはその間の消息を伝えるものである。

黒田清輝氏の巴里だより

先頃文部省より美術教育取調の命を受け目下佛國に滞留中なる
黒田清輝氏の情報左の如し

(前略) 學校の爲の取調は少しづつ始めて居るが何分今は休暇中
で充分な事は出来ない▲繪畫と彫刻のコンクール、ド、ロームが
濟んで其成績を見た どうも此處の美術學校風の教育はいかにも
型に入れた様で面白くない▲博覽會の美術館と云ふのは非常に廣
大なもので佛國は勿論ハンガリア、オ、ストリア、伊太利、獨
逸、イスパニア、イギリス、アメリカ合衆國、日本、オランダ、
ベルジック、ロシア、^[ボ]ホルトガル、ノルヴェエ、ペルー、ルーメニ
ア、スエーデン、スキス、などの繪畫彫刻物が一杯で二度三度で
はとも見盡くす事は出来ない これ等の新らしい製作品の外に
佛國の百年以來の諸大家の製作品をならべた^[「字欠落」]などもある 實に
盛んなものだ こんなに方々の國の美術品を一つに集めてくらべ
て見るとます／＼日本の品物のつまらないのに驚く 吾々は中々
ぼんやりして居る譯には行かない 此博覽會が濟んで色々の議論
家が日本へ歸つた時には随分やかましい種々な^{ちぢく}理窟が出ることだ
らうが先づ議論より仕事が第一だ どうしても少し眞面目に勉強
しないとだめだ ▲岡田和田いづれも達者で暮らして居る、岡田
は今迄何にも學校へ送らなかつたが三年分を愈近日に送り出すか
ら其積りで居て呉れ ▲岡田和田等は今迄は宿屋住居をやつて居
たが此十日頃からは一つのアトリエを借りて新たな生活方をやる
ことに勧めて置いた これは他日の在巴里日本美術研究所とでも
云ふ様な我美術學校の出張所の下ごしらへの積だ ▲此處の市

中をぶら付くと學校の参考品に買つて歸りたい古畫などが比較的
に安くて澤山あるけれども迎ても力が及ばないから手に入れる分
には行かない 力に及ぶ丈の品を二つ三つは手に入れたが参考品
と云ふものが二つや三つ位あつても餘り役には立たない さうし
て貧書生の悲しさは僅二つ三つの畫を買つた爲めにもう小使錢に
不自由を感じると云ふ姿だ こんな事ではだめだ ▲此度の巴里
の生活は甚だ面白くない(氣持の上から) 支那との戦争後は歐
洲で日本人を見ても支那人といふ奴は無い様になつたと聞いて居
たが夫れは全くのうそだ やはり支那人とぬかす奴が多いので困
る云々

なお、右博覽會に關して日本政府が作成した報告書は明治三十五
年三月に『千九百年巴里万国博覽會 臨時博覽會事務局報告』と題
して農商務省から発行されているが、美術の部の編集は専ら久米桂
一郎が担当した。

⑧ 関西教育大会への出品

本年七月三十一日より一週間富山市で関西教育大会が開かれ、同
会々長檜垣直右の依頼により久保田鼎校長は左記の作品を本校より
出品した。

日本画科

(卒業制作) 下村晴三郎「熊野御前花見」、天草友雄「悉達太子」、
高橋勇「秋景山水」、斎藤新助「晋文公受塊」、御船彦次郎「深
林遊猿」、移川三郎「秋景山水」